

現代語・若者言葉・ことわざ・慣用句について

～ことわざ・慣用句の意味の変遷～

福岡県立鞍手高等学校

林田侑大 清水敬祐 瀧口舜也 宮木悠多

1. テーマ設定の理由

近年、現代語や若者言葉といった当世風の言葉が普及している一方、若者がことわざや慣用句、故事成語などの歴史ある言葉の意味を理解できていない現状がある。2018年に行われた文化庁による「国語に関する世論調査」において正しい意味で言葉が使えているかという調査で、「無然」「御の字」「砂をかむよう」という三つの項目で、それぞれ正しい意味で使っていた割合が「無然」が28.1%「御の字」が36.6%「砂をかむよう」が32.1%と、どれも四割を下回っている結果となった。それに加え、「タピる」「卍」「フロリダ」という風な若者言葉と呼ばれるものが生まれ、日本語がさらに複雑化してきている。そこで、私たちが生活を送るうえでこのような現状をどのように実感し、その原因とは何なのか調査したいと思いテーマを設定した。

2. 背景・現状

先で述べた通り、「国語に関する世論調査」においてことわざや慣用句、故事成語などが本来の意味として使われていない現状がある。また、本来の意味と間違った意味で使われ続け、その意味が正しいとされる様になったもの、正しかった意味が使われなくなった言葉まで存在する。それだけではなく、使いどころを間違えることや、その言葉の意味の程度に見合った使い方がされていないという問題も出てきている。若者が正しいと思い使った言葉が年配の人に伝わらないことなどもこのような背景によるものと推察される。

ことわざ・慣用句・故事成語などが正しく使われていないという問題もあるが、近年「若者言葉」というものによる社会問題も発生している。若者言葉とは、10代から20代くらいまでの若者が言葉を短縮したり、名詞の後に「～する」の「る」をつけて動詞にして用いたりする言葉、あるいは俗語やスラングのようなもののことだ。このような言葉を使い日常的に会話をしているため、正しい日本語を使えなくなってしまうことが懸念されており、親しい間柄ならまだしも目上の人に対してや改まった場などでそのような言葉を使いトラブルを引き起こしている事例もある。

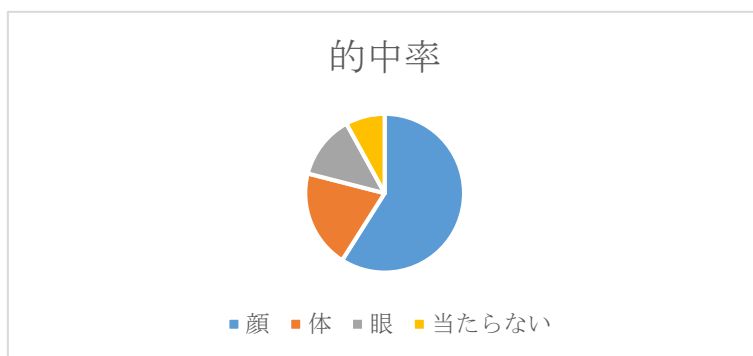
ここ数年から行われている「JC・JK 流行語大賞」という10代後半の女子を対象としたその年に流行った若者言葉をランキング化するもの、TwitterやFacebook、Instagram、LINE、TikTokなどのソーシャルネットワークサービスで若者言葉が使用されていることが主な原因となっている。

3 研究内容

まず私たちは、ことわざが発生する要因を調べるために下記の実験を試みた。

(1) 「二階から目薬」はどれほど難しいことを表しているのかについての実験

家の二階から目薬を垂らし、100回のうち何回眼の中に入れることができるのか実際に実験してみた。結果は以下のとおりである。



顔に当たった回数が59回、体に当たった回数が20回、目に入った回数が13回、当たらなかったのが8回。この結果からわかることは「二階から目薬り」はさほど難しいことではないということだ。

(2) 次に、日頃使っている言葉が本当に正しい意味で使えているかどうかをいくつかの言葉を挙げて調査した。結果は以下のとおりである。

間違った意味で使われる言葉	本来と異なる意味 (×誤用)	%	本来の意味 (○正解)	%	使ったことがない%
失笑する	笑いも出ないくらい呆れる	61.8	思わず笑う	22.6	11.6
悪びれる	虚勢を張って悪事を働いても悪いと思わない態度をとる	55.3	恥ずかしがったり卑屈な態度をとる	25.6	19.7

4. 結論

研究の結果から、「二階から目薬」ということわざは極端に難しくないときでも使ってよいということがわかった。このように、私たちがふだん、何気なく使っていることわざも、意味が少し違ってくるものや180°違ってくることわざもあることが分かった。

したがって私たちは若者言葉を使いすぎず、正しい意味での言葉遣い、ことわざを使用し、日本国民として正しい日本語を使用、後世に伝えていく必要がある。